
野球馬鹿に恋をした。

kamall

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野球馬鹿に恋をした。

【Nコード】

N4286F

【作者名】

kamall

【あらすじ】

あたしは中学校2年生の終りに君と出会った。真黒に焼けた肌、溢れる笑顔。そんな野球馬鹿で優しい君に恋をした。大好きだったあの時は忘れない。

・出会い（前書き）

読み辛い所も多々ありますが・・・多めに見てやって下さいww

：出会い

正太と出会えて、正太に恋して本当に良かった。

あたしと正太が初めて会ったのは中学校2年生の終りだった。

あたしが転校生、正太が学級委員。

一番初めは何の意識もしてなかったのに、いつの間にかこんなに大好きになってた。

きっかけなんて無かった。ただ知らないうちに正太の姿を目で追ってた。

正太は野球バカでいつも本当に馬鹿みたいに一生懸命練習してた。

あたしは陸上部だったから、野球部とは練習場が隣同士だった。

それをいいことにあたしは練習の合間に何度も振り返って野球グラウンドを見てた。

それが原因で先輩に怒られたこともあった。

でも正太はあたしが怒られてるのを見つけるといつもいたずらっ子のような目であたしを見た。

それがなんだか嬉しくてあたしは笑顔を返してた。

そんな正太も練習中はまるで別人だった。

真剣な顔で空に舞う白球を見つめていた。

正太の日に焼けた黒い肌と光る汗、真っ白な雲に青すぎる空。

それが綺麗に重なってあたしは時間も忘れて見入ってしまった。

まあ結局先輩に怒られちゃったけど。

それでもその光景はあたしの眼に焼き付いていた。

この頃からあたしは正太の事を好きだったんだと思う。

部活が終わると正太は真っ先に家に帰る。

塾とか弟の世話があるらしい。

そんな所もしっかりしてるなーと思った。

正太の学校での仕事はこうだ。

学級委員・体育委員・英語係・理科係・野球部の2年主将・記録員。

これだけの仕事をやって、なおかつ家事に塾。

正直超人だと思う。

そんな責任感が強くて、みんなに好かれてる正太の事が本当に大好きだった。

これがあたしと正太の出会い。

：文化祭 - 1 -

あたしが転校してきて初めての行事は、
「文化祭」だった。

まあ文化祭って言うっても展示をしたり、劇をしたりするだけなんだけど。

ちなみにあたしのクラスは
「展示」で、
プラネタリウムをやることになっていた

「ねえー加藤！！こっち手伝ってよぉー」

女の子特有の甘い声が飛んだ。

加藤っていうのは正太の苗字。

正太は背はあんまり大きい方ではなかったけど、野球部ってこともあって

ガタイは良かったから、力仕事の時には引っ張りだだった。

「ちょっと待って！これ終わったらすぐ行くから」

正太はその女の子に向けて、屈託のない笑顔を向けていた。

あたしの中で何かがつつかえた気がした。

それに運悪くあたしはプラネタリウムの本体作成部隊で

正太は展示物作成部隊だったから、話す機会も少なくなっていた。

そんな中であたしに声をかけてくる男の子が居た。

その名も

「池ちゃん」

頭がよくて、サッカー部のキャプテンで、性格もいい非の打ちどころがない完璧な男の子。

でも一つ欠点は、背が小さいってこと。

それは自分でも自覚してるようで、身長の話は池ちゃんの前ではタブーになっていた。

そんな池ちゃんはあたしと同じ本体作成部隊だったからよく話した。

作業をするのも忘れて話し込んでいた時もあった位に。

池ちゃんとはあたしにとっていつの間にか

「親友」という位置付けになっていた。

池ちゃんには何でも話せたし、話してくれもした。

もちろん正太の事も相談した。

色々話してて分かったのは、正太にとってあたしは「友達」

以外の何でもないってこと。

なんでも正太には好きな人が居るらしくて、その子以外は見えないそう。

あたしに勝ち目はないって事。

何となく分かってたけど、現実に行われるとショックな部分も多かった。

落ち込んでるあたしに池ちゃんは温かく接してくれた。

その温かさがその時のあたしにはとても心地よかった。

そんなことをしてるうちに文化祭の準備は着々と進んでいった。

始めは何となくしか出来てなかったプラネタリウムも今では立派な物になっていた。

あとは明日の本番を待つだけだと意気込んでたあたしに、誰かが話しかけてきた。

振り返ってみるとそこには、あたしが求めている人物がいた。

坊主頭に黒い肌、細い眉毛に優しいそうな瞳。

正太が話しかけてくれた。

「おおー！！すごい。お前らよくここまで仕上げたなー！！まじすげえよ」

オーバーな位のリアクションで褒める正太にあたしはちょっと苦笑
いをした。

「正太は大袈裟だよ！でもありがとね」

あたしがそういうと正太は太陽のような笑顔で笑ってくれた。

あたしはこの笑顔が自分だけの物になればと、願わずにはいられな
かった。

その後もあたしと正太は延々と話していた。

すっごく楽しくて、このまま時間が止まればいいのにつて思ったり
もした。

本当に幸せな時間をあたしは過ごしていた。

でもこの時あたしは、2人を見つめる人影に気付かずしていた。

明日はいよいよ文化祭当日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4286f/>

野球馬鹿に恋をした。

2010年10月11日17時39分発行